

<抜刷り>

# 富士見市立資料館調査研究報告

## 第2号

富士見市立考古館開館50周年記念号

2024.12.28

埼玉県 富士見市立資料館

講演記録	荒井幹夫	無我夢中 - 考古館創成期 -
講演記録	会田明	市民の好奇心が考古館を変えた
回想	和田雅子	とにかく熱かった
論文	和田晋治	縄文中期勝坂式期の猪装飾付土器
論文	早坂廣人	花積下層～関山式土器について
事例報告	駒木敦子	公民館で「社会教育施設の専門職」について考えた
研究ノート	山野健一	石鳥居が伝える江戸と鶴馬の結びつき
研究ノート	田ノ上和宏	入間ごぼうに関する調査と考察
資料紹介	佐藤一也	上内手遺跡第10地点出土の陶磁器
資料紹介	高橋宏之	南通遺跡出土の下小野系土器について
★資料紹介	大野朝日	新田遺跡第1号住居跡について
資料紹介	齋藤麻那	打越遺跡出土の押出型石匙について
資料紹介	菅沼慎太郎	南通遺跡近世墓坑と出土銭貨

※1 本文中の執筆者の肩書きは2024年3月31日時点です

※2 見開きの左側に偶数ページがくると見やすいように編集しています  
両面印刷する場合はこのページごと印刷することをおすすめします  
2ページずつ印刷する場合はこのページを飛ばして印刷してください

※3 抜刷り共通の表紙です。該当する記事に★を付けています

<資料紹介>

## 新田遺跡第1号住居跡について

大野朝日（富士見市教育委員会生涯学習課）

### 1) 新田遺跡第1号住居跡について

#### 1. 新田遺跡の立地と概要

新田遺跡は、武蔵野台地縁辺部、台地を開析して流れる富士見江川の左岸に分布する遺跡の1つである。遺跡の標高は約20～21mを測り、北側では御庵遺跡、南側では八ヶ上遺跡に接している。

令和5年12月現在までに、計21地点で調査が行われており、主として縄文時代前期～中期の遺構・遺物が確認され、その内訳は前期の住居跡3軒、中期の住居跡4軒、土坑11基、集石24基となっている。

弥生時代～古代の遺構は確認されていないが、中世以降と推測される遺構として溝跡3条、柵列2条が確認されている。また、第3地点・第4地点の報告（会田1982）において「地元の人のお話によると、調査区の西隣に『カネヅカ』があったと聞いた」と記載され、塚に類する遺構が近代ごろまで残存していた可能性があるが、現在それらしい地形は確認できない。

#### 2. 新田遺跡第1号住居跡の調査について

新田遺跡第1号住居跡（1J）が検出された地点は、現在の富士見市関沢一丁目2707-2、調査時点における富士見市大字鶴馬2707-2に位置し、本稿で「新田遺跡A地点」と呼称する範囲（第1図）である。本地点の調査は1973年（昭和48年）の9月に行われたものであり、これは新田遺跡における最初の発掘調査であった。調査面積はおよそ150㎡であった。

詳細は後述するが、本住居跡からは勝坂式土器と阿玉台式土器の伴った出土が認められた。当時の富士見市域において、阿玉台式土器がまとまって出土する遺構は極めて稀であった。こ

の調査成果については、同年10月に発行された「広報ふじみ」において紹介され、縄文時代中期の「うき」と「おもり」が出土したとの記載がある（富士見市役所1973）。1986年に発行された富士見市史資料編では、新田遺跡についての記載においてこの調査をとりあげ、「阿玉台期の住居跡が一軒検出されている」ことや、住居跡の平面図を示した（会田ほか1986）。しかしながら、この調査についての正式な発掘調査報告については未刊のみであった。

その後、今日に至るまで、新田遺跡および隣接する遺跡である八ヶ上遺跡・御庵遺跡では開発等に伴う発掘調査が重ねられ、遺構分布の様相も明らかになりつつある。そのなかで確認された縄文時代中期前半（勝坂式・阿玉台式並行期）の住居跡は決して多いと言えるものではないが、武蔵野台地北部における当該期の集落跡そのものが限られた数であることを踏まえれば、資料としての価値は高いと言えるだろう。また、今後の調査で資料数が増えていくことも十分に考えられる。

このような状況においては、発掘調査から50年以上が経過しているとはいえ、新田遺跡第1号住居跡の調査の記録や出土遺物を示すことの意義は少なくないと考え、本稿で報告を行う次第である。失われてしまった調査情報もあり、調査報告としては至らない部分が多々ある。ご容赦願いたい。

#### 3. 新田遺跡第1号住居跡とその出土遺物 第1号住居跡（1J）（図2）

〔位置〕新田遺跡A地点の南東隅に位置する。

〔構造〕（平面形）やや五角形に近い不整形円形を呈する（規模）長径3.6m×短径3.3mを

測る。(主軸方位) N-31°-W (床) ほぼ平坦である。壁際に深さ 2 ~ 15 cmをはかる壁溝・小ピットが断続的に認められる。(壁高) 24 ~ 33 cmを測る。(炉) 浅い皿状の掘り込みを持つ地床炉だが、中央で 7 ~ 15 cmほどの被熱した礫が 4 点検出されたと記録されており、いわゆる添石炉とも考えられるか。住居跡中央のやや北西寄りに位置し、長径 65 cm×短径 55 cmの不整形円形を呈する。(柱穴) 床面上に P1 ~ P5 が確認され、5 本柱の住居跡が想定される。P1 ~ P4 は深さ 48 cm~ 69 cm、P5 は深さ 23 cmを測る。P5 は浅く径もやや小さいことから、補助的な柱穴、あるいは入口施設に伴うものだったとも考えられる。

[覆土] 2 層に分層される。調査記録においては第 1 層を指して『擬似覆土』とも『覆土』ともとする記述があり、表土層と遺構覆土との境は漸移的だったことが伺われる。

[遺物出土状況] 縄文土器、土製品、石器類、礫が出土している。わずかな出土状況写真を除いては、出土位置や層位の記録は残っておらず、覆土中・床面上を含めた、住居跡に伴う遺物という大きな括りで捉えられるものである。

[時期] 勝坂 1b(新道)式・阿玉台Ⅱ式期  
第1号住居跡出土遺物(図4~6・表2)

土器片は阿玉台式が主体となる。阿玉台Ⅰb式の可能性がある土器片も含むが、ほとんどは阿玉台Ⅱ式に帰属する。次いで多いのは勝坂式。勝坂 1b 式を主とする。その他、周囲からの流れ込みと思われる縄文時代早期・前期の土器が確認された。なかでも縄文時代前期黒浜式期の土器は多量を占め、大ぶりの破片も含まれている。本住居跡周囲に当該時期の遺構が存在することを示唆しているように思われる。礫を除いた遺物出土量はテンバコ 1 箱程度である。接合や石こう入れ後の計測のため正確性を欠くが、土器の重量比としては、阿玉台式が約 3,300g、勝坂式が約 2,400g、前期の土器が約 1,000g、早期の土器が約 100g、型式不明の無文土器が約 1700g であった。土製品は土器片錘 1 点が確

認できた。石器類の内訳は、製品として、打製石斧 6 点(砂岩 4・頁岩 1・ホルンフェルス 1)、凹基の石鏃 1 点(黒曜石)、浮子 1 点(軽石)。剥片・碎片類として、砂岩・頁岩・黒曜石が少量認められる。

12 点を図示した。1 ~ 4 は阿玉台式。1-1 と 1-2 は同一個体の阿玉台Ⅱ式深鉢胴部である。口縁側の割れ口に調整が行われており、意図的な折断が想定される。また内外面ともに下半で器面がやや荒れていることから、廃棄される前に炉体土器として用いられた可能性がある。

5 ~ 8 は勝坂式。5 は円盤状の口縁部突起(把手)で、断面四角形の隆帯を蛇行させ装飾する。

9 は土器片錘。雲母を多量に含む無文土器片を素材とする。長軸に切れ込みをもつ楕円形の平面形態が想定されるが、一部を欠損する。10 は黒曜石製の石鏃。凹基。端部は欠損する。端部付近および脚部には微細な槌状の剥離が認められる。端部の欠損も含めて、使用に伴う衝撃剥離であろう。11 はホルンフェルス製の打製石斧で、本住居跡から出土した打製石斧のうち唯一の完形に近い資料である。12 は軽石製の浮子。摩擦により長球形に調整され、中央部に両面から穿孔する。表面はやや光沢感がある。

## 2) 富士見江川左岸の縄文中期前半の住居跡 1. 集成の方針

富士見市域を含めた、武蔵野台地北部における縄文時代中期前半の住居跡については、坪田(1998)において網羅的な集成がなされ、八ヶ上遺跡・新田遺跡の当該期住居跡についても記載・分類が行われている。しかしながら、前節で述べた新田遺跡第1号住居跡は正式な報告が未刊であったことから記載がされていなかった。また、新田遺跡においては近年の調査によって新たに確認された住居跡があるほか、隣接する御庵遺跡においても当該期の住居跡が確認されたことは新たな知見であり、集落跡の広がりが3遺跡にまたがっていることが明らかになった。本節では、坪田(1988)以降に報告また

は発掘調査された富士見江川左岸における縄文時代中期前半の住居跡について概要をまとめ、新資料を加えた集成とした(表1)。

## 2. 御庵遺跡

現在までに3軒が調査・報告され、いずれも坪田(1988)以降の報告である。

### 御庵遺跡第17号住居跡(17J)

[構造](平面形)円形(規模)4.5×4.3m(主軸方位)N-41°-W(壁高)約18cm。やや急に立ち上がる。(柱穴)支柱穴は5本(炉)緩やかな掘り込みを伴う石囲炉

[主な遺物]勝坂1b式が主体となる。阿玉台Ib式が含まれている。遺物総量はおよそテンバコ1/6箱

[時期]勝坂1b式期・阿玉台Ib式期

### 御庵遺跡第18号住居跡(18J)

[構造](平面形)隅丸長方形(規模)4.3×3.1m(主軸方位)N-23°-W(壁高)約13cm。緩やかに立ち上がる。(柱穴)3本が支柱穴と報告されるが、その他にも掘り込みが深いピットが多数配され、配列は不整である。

(炉)地床炉。炉面ではおよそ半周する胴部下半の土器片が配されるような形で出土した。

[主な遺物]勝坂1b～2式が主体となる。阿玉台Ib～II式が含まれている。遺物総量はおよそテンバコ1/6箱

[時期]勝坂1b～2・阿玉台Ib～II式期

### 御庵遺跡第23号住居跡(23J)

[構造](平面形)やや隅丸方形に近い円形(規模)5.0×4.6m(主軸方位)N-30°-W(壁高)約50cm。緩やかに立ち上がる。北側では二段掘り込みに近い形をとる箇所も確認できる。(柱穴)支柱穴は4本(炉)埋甕炉。阿玉台Ib～II式2個体、勝坂1b式1個体の計3個体の埋設土器が確認され、少なくともそのうち2個体には新旧関係が確認できる。

[主な遺物]勝坂1b式が主体となる。阿玉台Ib～II式が含まれている。遺物総量はおよそテンバコ1箱分

[時期]勝坂1b式期・阿玉台Ib～II式期

[時期]勝坂1b・阿玉台Ib～II式期

## 3. 新田遺跡

現在までに4軒が調査され、うち1軒(3J)のみ坪田(1988)に掲載されている。

### 新田遺跡第1号住居跡(1J)

前節に記述したとおり。

### 新田遺跡第5号住居跡(5J)

[構造](平面形)円形(規模)4.3×4.16m(主軸方位)N-12°-W(壁高)約28cm。緩やかに立ち上がる。(柱穴)支柱穴は4本もしくは5本(炉)深さ31cmの掘り込みをもち、大型礫を敷き詰めて構築している。直上では小型礫が集中して集石をなしている。

[主な遺物]勝坂1b式が主体となる。阿玉台Ib～II式が含まれている。遺物総量はおよそテンバコ1箱分

[時期]勝坂1b・阿玉台Ib～II式期

### 新田遺跡第7号住居跡(7J)

[構造](平面形)不整楕円形～不整円形(規模)3.6×3.6m以上(主軸方位)N-20°-W(壁高)約20cm。緩やかに立ち上がる。(柱穴)支柱穴は4本もしくは5本(炉)確認できない。

[主な遺物]縄文土器片は11点のみと僅少。うち7点は縄文前期。4点が中期であり、うち2点は阿玉台系の土器片

[時期]縄文時代中期前半

## 4. 八ヶ上遺跡

現在までに5軒が調査・報告されている。すべて坪田(1988)以前に報告されたものであるため、ここでは記述を省略する。

## 5. 集落跡の全体像

上記の住居跡を含め、御庵遺跡、新田遺跡、八ヶ上遺跡で確認されている縄文時代中期前半の住居跡は合計12軒を数えることとなった。各住居跡の概要について、表1に示した。また、各住居跡が検出された位置を図1に、住居跡の

様相を図7・8に、それぞれ示した。なお、表1における「時期」および「形態」の項目では、坪田氏集成と同様の分類方法を用いた。

図1に示したとおり、富士見江川沿いの台地上に、3遺跡をまたぐ南北約300m×東西約170mの範囲で縄文時代中期前半の住居跡の分布域が存在する。

このうち、勝坂1a(貉沢)式・阿玉台Ib式並行期(坪田(1988)におけるI期)の住居跡は、分布域の南寄りで2軒が検出されている。

勝坂1b(新道)式・阿玉台Ib～II式並行期(坪田(1988)におけるII期～III期)の範疇に収まる住居跡は最も多く、12軒中9軒が該当し、分布域の全体に点在している。この時期の住居跡から出土する土器は、基本的に勝坂式を主体として、阿玉台式を共伴している。ただし新田遺跡第1号住居跡(1J)においては出土量が逆転し、阿玉台II式が主体をなしており、本集落跡においてはやや特異な様相を示すといえる。

勝坂2(藤内)式・阿玉台II式並行期(坪田(1988)におけるIV期)には住居跡の数は減少し、確認できるのは新田遺跡第6号住居跡(6J)のほか、御庵遺跡第18号住居跡(18J)がその可能性を残すのみである。

勝坂2式・阿玉台III式並行期(坪田(1988)におけるV期)の住居跡は確認されていない。

## 引用・参考文献

- 会田明 1982「新田遺跡第3・第4地点」『中央遺跡群V』富士見市文化財報告(24) 富士見市教育委員会
- 会田明ほか 1986「八ヶ上・新田遺跡」『富士見市史 資料編2 考古』富士見市教育委員会市史編さん室
- 大野朝日 2024「御庵遺跡第50地点」『富士見市遺跡群XVII』富士見市文化財報告(76) 富士見市教育委員会
- 木谷武義 1974「住居址様遺構(L.N.08・09)とその遺構」『埼玉県富士見市所在 八ヶ上遺跡 打越遺跡 北通遺跡 発掘調査報告書』富士見市文化財報告(7) 富士見市教育委員会
- 小出輝雄、細田勝 1987「新田遺跡第6地点」『富士見市遺跡群V』富士見市文化財報告(37) 富士見市教育委員会
- 佐藤一也 2020「御庵遺跡第42地点発掘調査報告書」富士見市遺跡調査会報告(76) 富士見市遺跡調査会
- 坪田幹夫 1998「考察」『亀居遺跡』大井町遺跡調査会報告(8) 大井町遺跡調査会
- 富士見市役所 編 1973「広報ふじみ」(101)
- 堀善之 2006「新田遺跡第9地点」『富士見市遺跡群XIV』富士見市文化財報告(58) 富士見市教育委員会
- 和田晋治 1990「八ヶ上遺跡第8地点」富士見市遺跡調査会報告(36) 富士見市遺跡調査会
- 和田晋治 1994「第13地点の調査」『八ヶ上遺跡第11・13地点発掘調査報告書』富士見市遺跡調査会報告(40) 富士見市遺跡調査会

## おわりに

富士見江川左岸における縄文時代中期前半の集落跡に含まれる住居跡からは、勝坂式と阿玉台式の伴った出土が認められ、複数の集団間での交流を伺わせる。

その中でも、阿玉台式が主体となって出土した新田遺跡第1号住居跡は、両型式の土器が炉体として共伴した八ヶ上遺跡第6号住居跡や御庵遺跡第23号住居跡と並び、武蔵野台地北部における両型式の関係を考えるうえで注目すべき資料といえるだろう。

本稿では住居跡のみを記述の対象としたが、御庵・新田・八ヶ上の各遺跡からは、遺物包含層・土坑・集石等からも当該期の土器が確認されている。

中でも3遺跡で計80基以上が確認されている集石については、それらすべてが当該期に帰属するわけではないだろうことを踏まえても、集落跡の様子を表す重要な要素である。

また、御庵遺跡から富士見江川を挟んで南東側、富士見江川右岸に位置する打越遺跡においても、当該期の住居跡1軒や包含層からの土器出土が確認されている。

これらの分布を加味すれば、集落の範囲は住居跡分布域よりも広域であった可能性が極めて高い。この集落跡の様相をより明らかにしていくことを、今後の課題としたい。

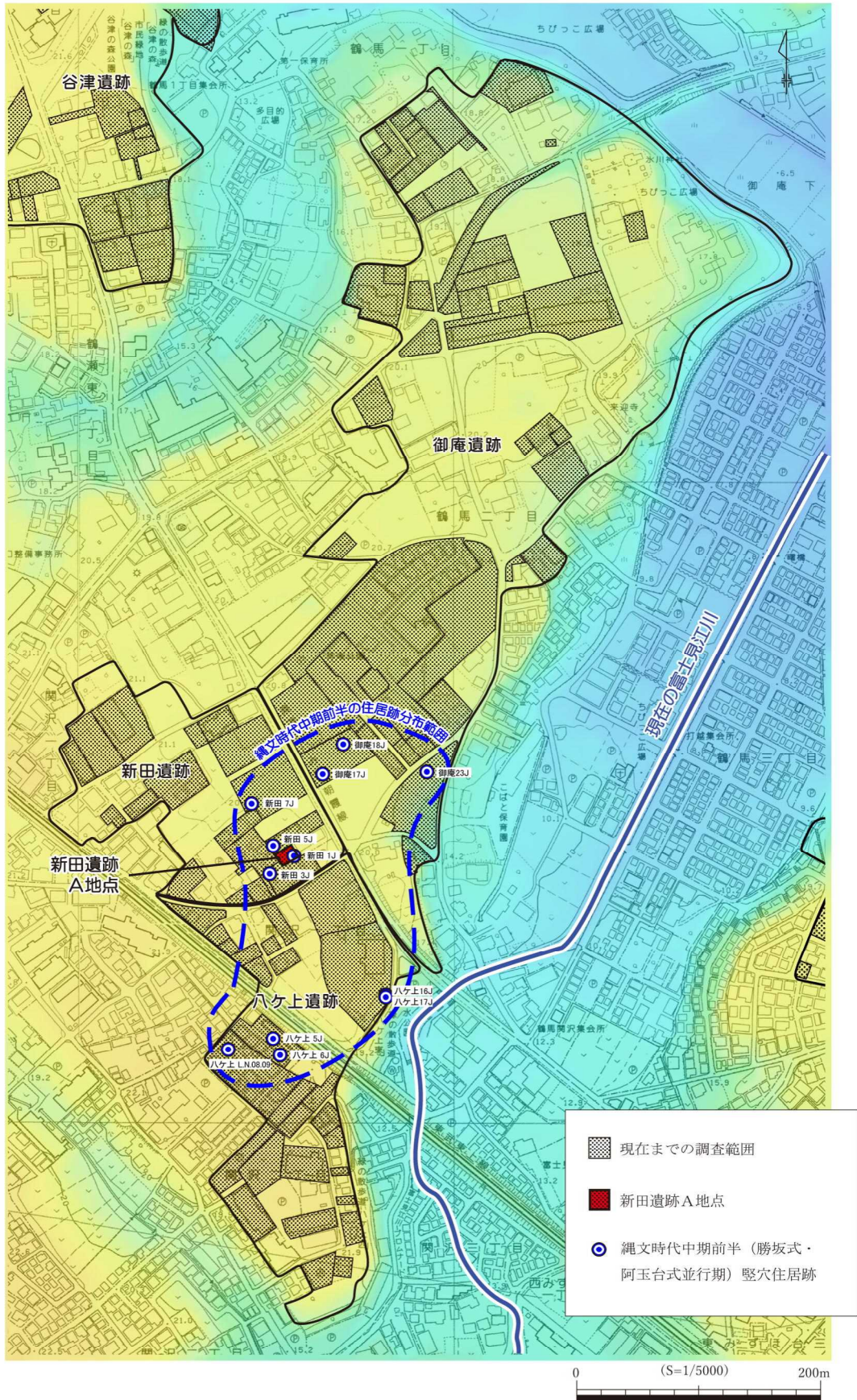


図1 新田遺跡 A地点 位置図 (1/5000)

表1 富士見江川左岸における縄文時代中期前半の住居跡  
(坪田 1998 を基に抜粋・改変。アミカケは今回追加した住居跡)

遺跡・地点名	遺構名	時期(※1)	形態(※2)	炉体土器	面積(m <sup>2</sup> )	備考	文献
御庵遺跡第42地点	17J	Ⅱ期	A-5-b3	-	15.2		佐藤2020
御庵遺跡第42地点	18J	Ⅲ～Ⅳ期	C-6-b1	-	13.3		佐藤2020
御庵遺跡第50地点	23J	Ⅱ～Ⅲ期	A-4-b2	Aが1個体(口縁～胴) Bが2個体(ともに胴)	12.0		大野2024
新田遺跡A地点	1J	Ⅲ期	A-5-b1	-	8.0		会田ほか1986
新田遺跡第6地点	3J	Ⅳ期	?-?-b1	-	-		小出・細田1987
新田遺跡第9地点	5J	Ⅱ～Ⅲ期	A-5-b1	-	11.0	多量の礫を敷いた炉跡。分類はb1(地床炉)とした	堀2006
新田遺跡第20地点	7J	?	B-5-a	-	-	遺物量少なく、時期は不明瞭	-
八ヶ上遺跡第8地点	5J	Ⅲ期	B-6-b2	Bと異系統(口縁～胴)	31.4		和田1990
八ヶ上遺跡第8地点	6J	Ⅰ期	B-4-b2	AとB(共に口縁～胴下)	10.2		和田1990
八ヶ上遺跡第13地点	16J	Ⅱ期	A-?-b1	-	12.5		和田1994
八ヶ上遺跡第13地点	17J	Ⅰ期	B-?-?	-	-	16号住居跡(16J)に切られる	和田1994
八ヶ上遺跡第1地点	L.N. 08・09	Ⅲ期	A-4-a	-	8.2	「住居跡様遺構」として報告されている	木谷1974

## ※1 [時期]

- Ⅰ期 貉沢式・阿玉台Ⅰb式古期  
Ⅱ期 新道式古期・阿玉台Ⅰb式新期  
Ⅲ期 新道式新期・阿玉台Ⅱ式古期  
Ⅳ期 藤内式古期・阿玉台Ⅱ式新期  
Ⅴ期 藤内式新期・阿玉台Ⅲ式

## ※2 [形態]

- (1) 平面形  
A 円形を呈するもの  
B 楕円形を呈するもの  
C 方形・隅丸方形を呈するもの  
D 二段掘り込みをもつもの  
(2) 主柱穴配置  
1 主柱穴をもたないもの  
2 床面中央に1本の主柱穴を有するもの  
4 主柱穴配置が四角形をなすもの  
5 主柱穴配置が五角形をなすもの  
6 主柱穴配置が六角形以上の多角形をなすもの  
(3) 炉の有無  
a 炉をもたないもの  
b1 炉(地床炉)をもつもの  
b2 土器を埋設するもの  
(阿玉台式=A、勝坂式=B、折衷型=AB)  
(使用部位 例:口縁～胴上=口縁～胴上半部使用)  
b3 石囲炉  
b4 添石炉

※1・2の分類は、坪田氏集成(坪田 1998)による。

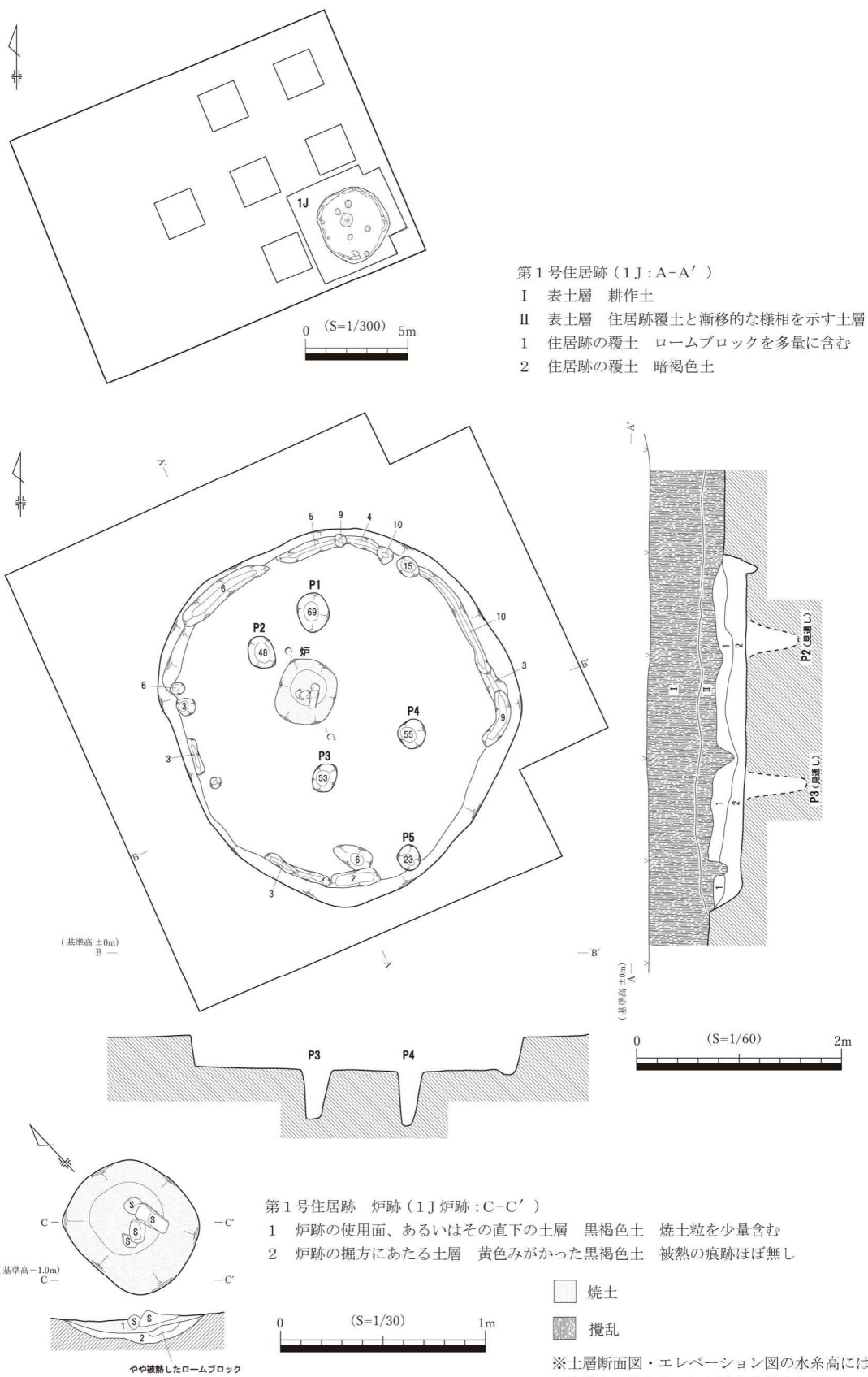
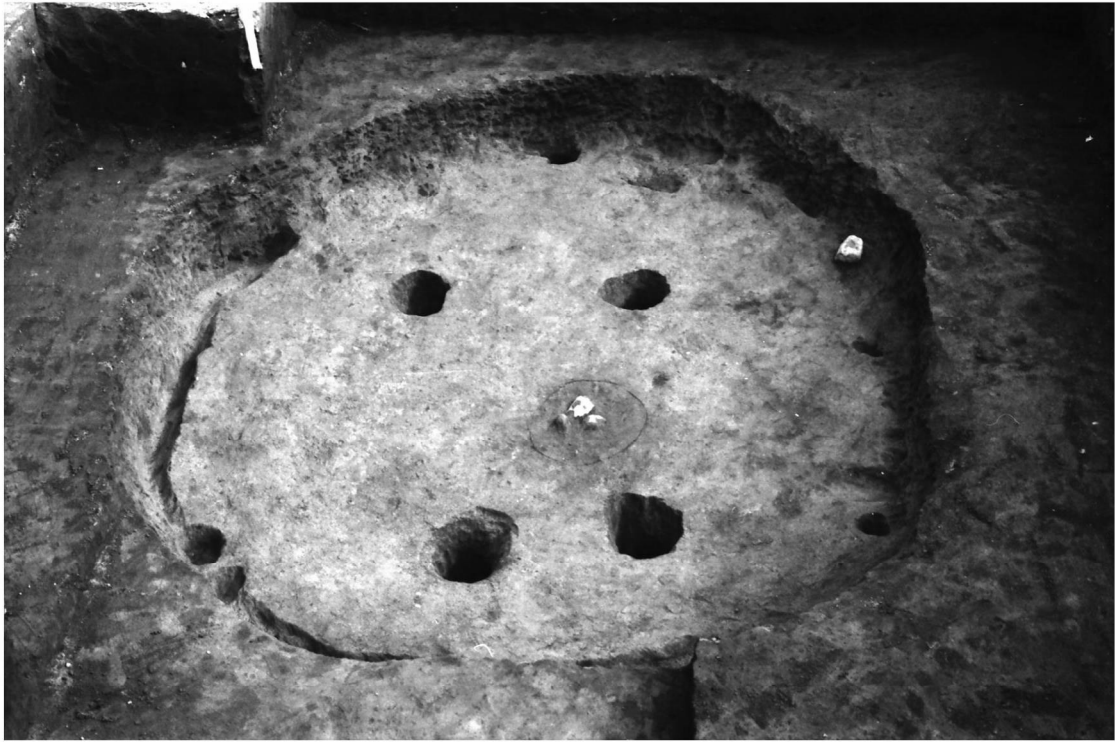


図2 新田遺跡 A 地点遺構分布図・新田遺跡第1号住居跡 (1J)





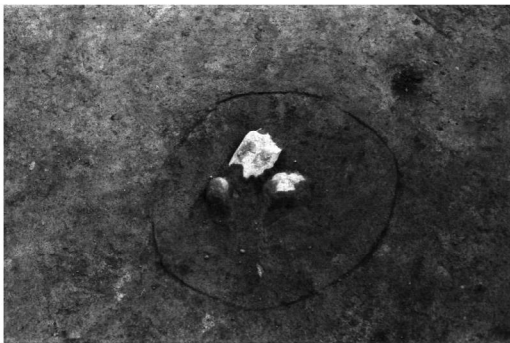
〔1〕新田遺跡第1号住居跡（1 J）完掘状況



〔2〕新田遺跡A地点発掘調査の様子



〔3〕新田遺跡第1号住居跡（1 J）発掘調査の様子



〔4〕新田遺跡第1号住居跡（1 J）炉跡検出状況



〔5〕新田遺跡第1号住居跡（1 J）浮子出土状況

図3 新田遺跡A地点調査写真

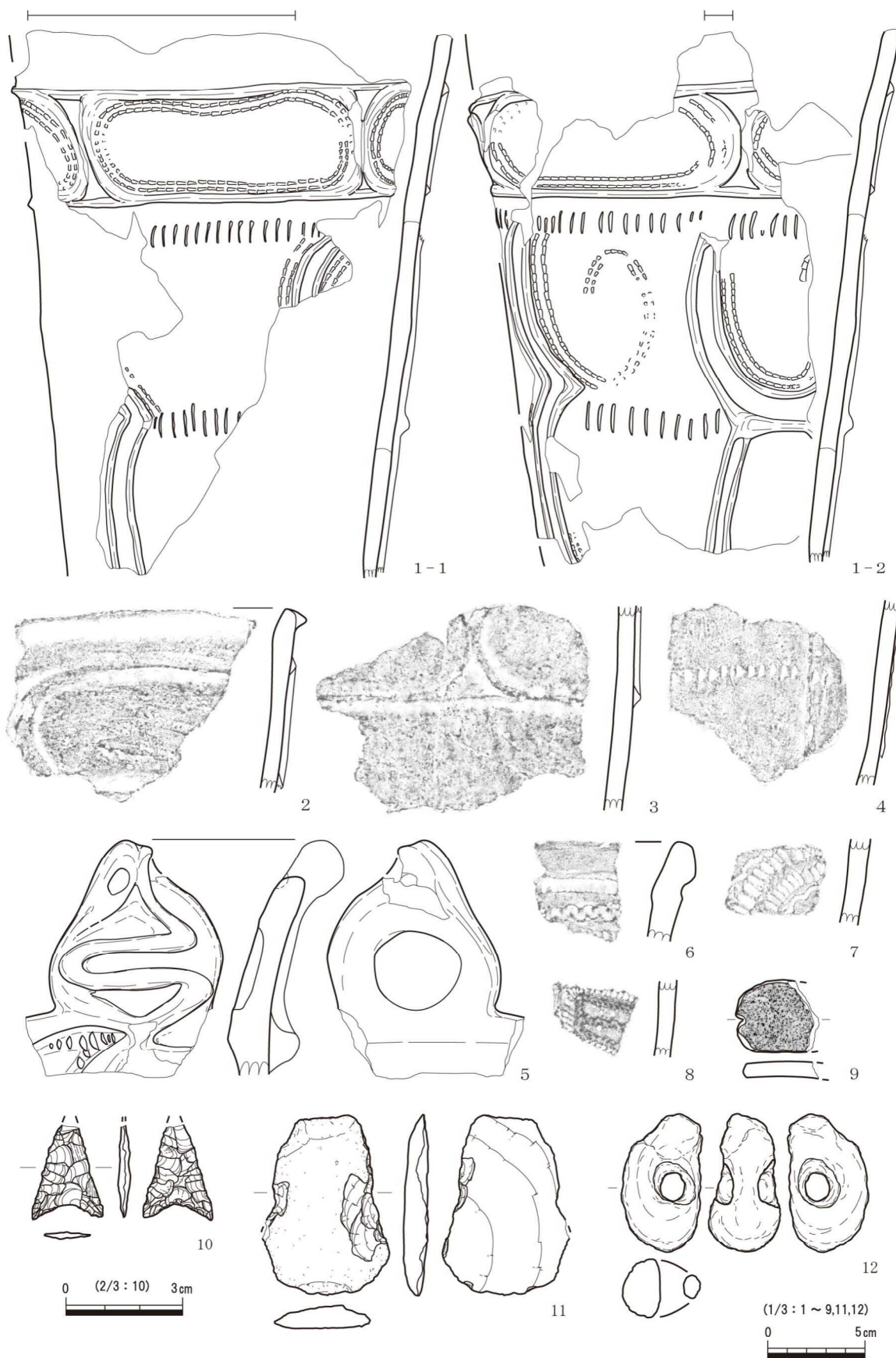


図4 新田遺跡第1号住居跡(1J)出土遺物

表2 新田遺跡第1号住居跡(1J)出土遺物観察表

土 器								
No.	出土 遺構	器種	法量 (単位はcm、*は現存、#は復元)			口縁遺存 (完形を 1とする)	色調	備考等
			口径	底径	器高			
図4 1-1	1J	深鉢	-	-	*27.8	0	褐色	1-1と1-2は同一個体 胎土に雲母を多量に含む 口縁部側は意図的な打ち欠き 外面下半で器面荒れ
図4 1-2	1J	深鉢	-	-	*28.0	0	褐色	内面下半で器面の黒変・荒れ 断面三角形の低い隆帯 半裁竹管状工具による結節沈線 横位に連続した刻み目 阿玉台Ⅱ式
図4 2	1J	深鉢	-	-	*9.5	1/5	暗褐色	胎土に雲母を多量に含む 断面三角形の隆帯 阿玉台式
図4 3	1J	深鉢	-	-	*11.3	0	暗褐色	胎土に雲母を多量に含む 断面三角形の隆帯 阿玉台式
図4 4	1J	深鉢	-	-	*9.2	0	暗褐色	胎土に雲母を多量に含む 断面三角形の低い隆帯 横位に連続した刻み目 阿玉台Ⅰb~Ⅱ式
図4 5	1J	深鉢	-	-	*12.3	わずか	褐色	粘土紐貼り付けによる断面四角形 の隆帯 結節沈線 胎土に雲母を含む 勝坂1b式か
図4 6	1J	深鉢	-	-	*5.1	わずか	赤褐色	胎土に雲母を含む 結節沈線 勝坂1b式か
図4 7	1J	深鉢	-	-	*7.5	0	褐色	結節沈線 勝坂1b式か
図4 8	1J	深鉢	-	-	*4.0	0	暗褐色	結節沈線 勝坂1b式か
土 製 品								
No.	出土 遺構	器種	法量 (単位はcm、*は現存、#は復元)			色調	備考等	
			長さ	幅	厚さ			
図4 9	1J	土器 片錘	*4.3	3.8	0.8	赤褐色	胎土に雲母を多量に含む無文の土器片を 素材とする 周縁の調整は摩擦による	
石 器								
No.	出土 遺構	器種	法量 (単位はcm、*は現存、#は復元)			材質	備考等	
			長さ	幅	厚さ			
図4 10	1J	石鏃	*2.4	1.8	0.3	黒曜石	凹基 端部欠損	
図4 11	1J	打製 石斧	9.3	6.6	1.4	ホルン フェルス	ほぼ完形	
図4 12	1J	浮子	7.1	4.2	3.7	軽石	完形 孔の直径:12~14mm 両面穿孔	



図5 新田遺跡第1号住居跡(1J)出土遺物写真1(図化資料)



図6 新田遺跡第1号住居跡(1J)出土遺物写真2(図化外資料)

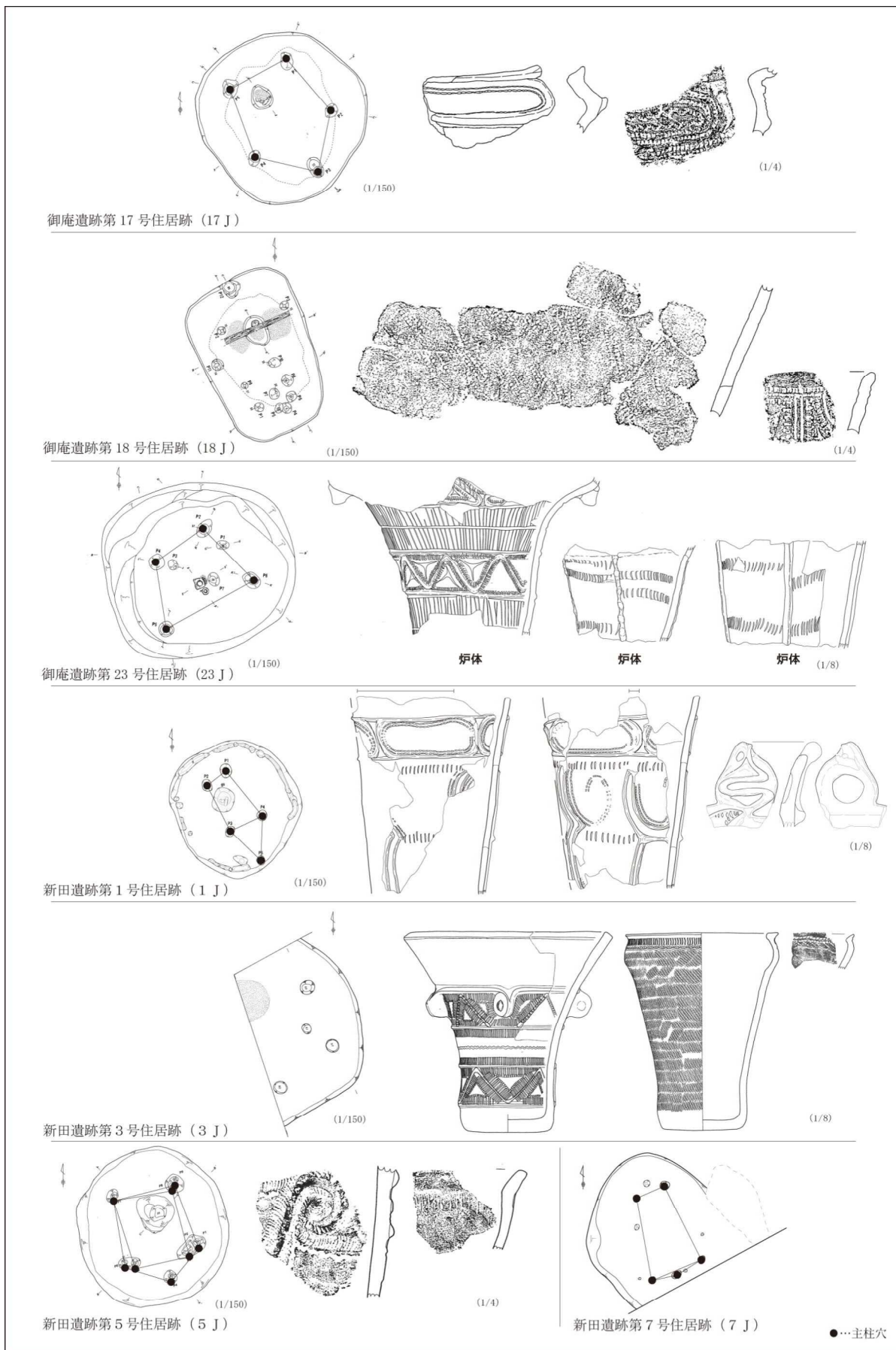


図7 富士見江川の左岸における縄文時代中期前半の住居跡(1)

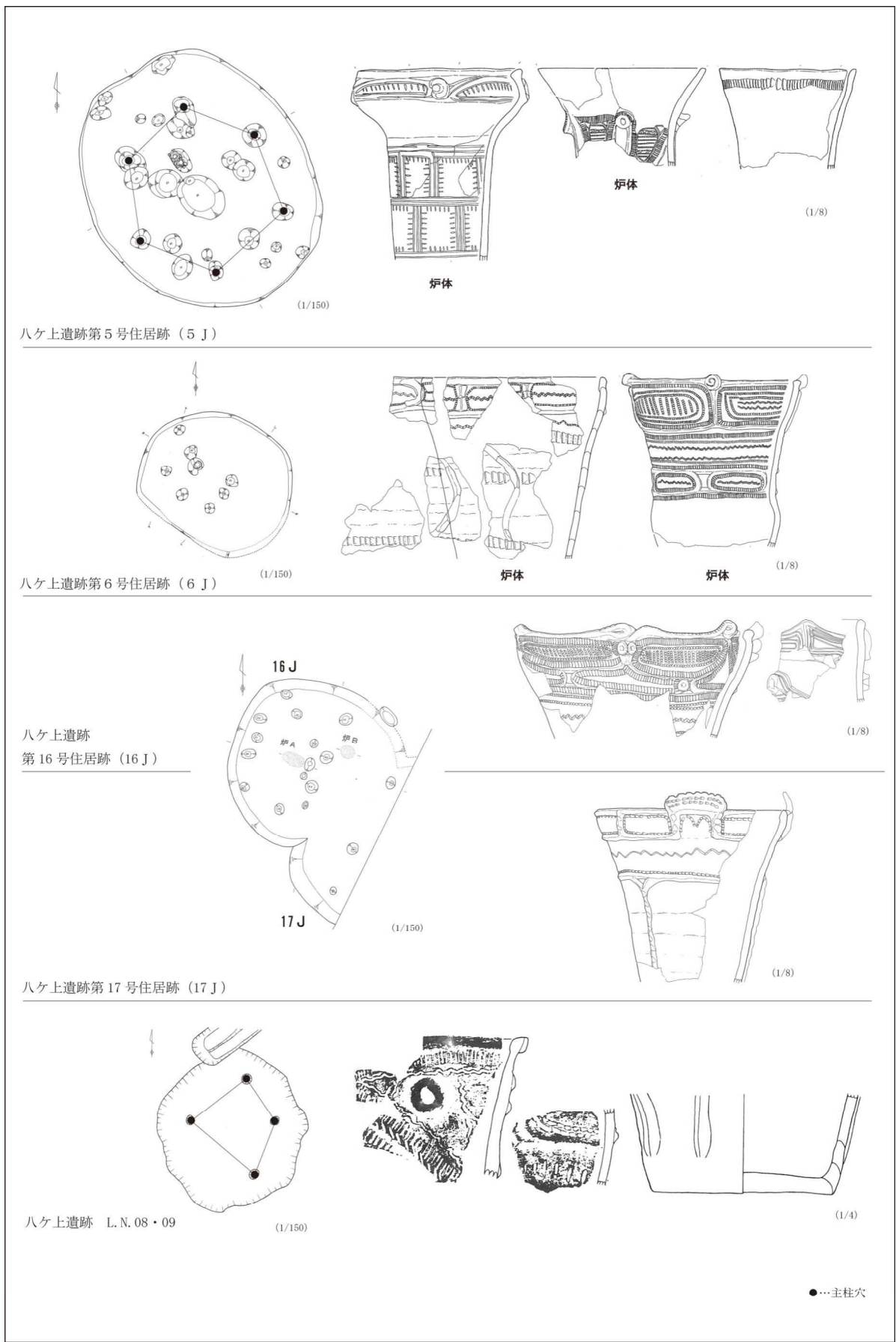


図8 富士見江川の左岸における縄文時代中期前半の住居跡(2)